



# スローカメラ宣言～ ピンホールの魔術師たちに学ぶ ゆるやか写真術

文／真形隆之 イラスト／藤井郁子  
屏写真／大竹敦人 ふろく撮影／前田保典

針であけたような小さな穴がひとつあるだけの「ピンホールカメラ」という名前のカメラ。どこを探してもレンズは見つからない。「これがカメラ」と言われても、にわかには信じられないかもしれない。しかし、そんな単純な機構こそがカメラの基本原理だと知る。手間と時間をたっぷりかけて写されるピンホール写真たち。スローに流れる時間の中で増幅される、どんな写真が撮れるかという期待感。ピンホールカメラは、そんな忘れかけていた気持ちを思い出させてくれる。ここでは、ピンホールに魅せられ、不思議な作品を生み出し続けている魔術師たちを紹介しつつ、そのしくみを解説していこう。



# 風景をそっくり 閉じ込めるガラス球

## 球体ピンホール写真

写真／大竹敦人 小森大輔

左ページの木の中央にはさまった、ガラスの球体。よく見ると、表面に何やら模様らしきものが見える。実は、これは、球体が置かれているその位置から見える周りの風景のネガ像。そして、この風景を取り込んだのが、ピンホールなのである。このガラスの球体は、とても奇妙ではあるが、これ自体がピンホール写真なのだ。Emulsificationと呼ばれるこの作品は、どのようにして生まれたのだろう。



ある作品展の一風景。ガラスの球体の内部にライトをセッティングすると、幻想的な世界が浮かび上がってくる。



Artist  
**大竹 敦人**  
Otake Atsuhito

東京藝術大学美術学部油画研究室常勤助手。学生に美術を教える傍ら、自らも積極的に作品を発表しているアーティスト。1970年東京生まれ。ホームページURLは、<http://www.akusyuu.com>



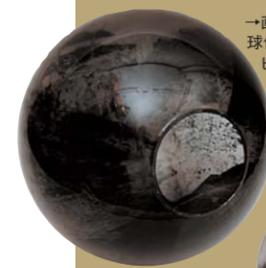
↑最初に写真乳剤を球体ガラスの内側に均一に塗る。うす暗い部屋で行われる。



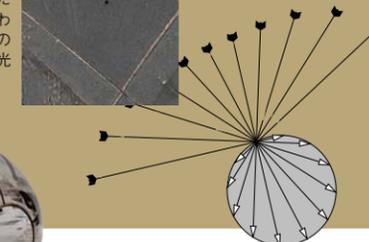
↑乳剤を塗った球体は光がもれないようにアルミで遮光する。1週間ほどかけて、一度にまとめて作るそうだ。



↑ガラスの球体はサイズが大きいほどたくさんの光が必要のため撮影時間は長くなる。数十分から数時間、場合によっては数日間放置しておくケースもあるという。



→直径40cmのガラスの球体に取り付けられたピンホール。直径わずか0.6mmのこの穴が、球体への光の入り口。



←あらゆる方向から入った光が球体内部で像を作る。上下左右約180度の画角で人間の眼球とほぼ同じ範囲が取り込める。

### 初めてのピンホール写真はデパートの壁面に写した

大竹氏とピンホールとの出会いは、少々変わっている。生まれて初めて挑戦したピンホール写真は、なんとデパートの壁を利用した巨大な作品だったという(デパート側からの依頼によるもので、勝手にやったわけではない)。

場所は、新宿タカシマヤ・タイムズスクエアのビル壁面(残念ながら、現在は公開さ

れていない)。壁と柱を囲って大きな暗室を作り、そこにピンホールを取り付けた。感光剤はデパートの大理石の壁に直接、写真乳剤を塗布して長時間露光。現像・定着処理もその場で行い、写像を生み出した。暗室をつくっていた壁を撤去すると、見事にビルの向かいの風景が写し出された。



「View of Time (1997)」8×5メートルという巨大な作品。写し出された風景は、上下逆さまのネガ像になっている。

### 原始的なものを 利用することで 新たな発見があると 思うんです

ピンホール写真というからには、カメラが必要だが…。そう、この球体は写真でありながら、カメラでもある。ピンホールから時間をかけてゆっくりと取り込まれた光は、カメラ自身の内面で像となる。浮かび上がった球体写真は、平面写真では再現できない不思議なものである。大竹「現代美術は、コンピュータなどに頼りすぎていると思います。ピンホールというのは原始的ですが、球体写真は、これまでの歴史にはなかったものです。美術を通して、そういう新しい発見、発明を提示していかなければと思うんです。」